

# アフリカ

## 最後のフロンティアに首相訪問

ジェトロ海外調査部中東アフリカ課長 的場 真太郎

2014年最初の外遊先として、安倍首相は“最後のフロンティア”といわれるアフリカを選んだ。「地球儀を俯瞰する外交」の一環として、1月10～14日まで、コートジボワール、モザンビーク、エチオピアを訪問した。これには筆者を含む約30の民間企業・団体の代表などが同行。この外遊で得られた成果は大きい。

### 首相の歴訪は8年ぶり

2013年の第5回アフリカ開発会議（TICAD V）で「できる限り早く、アフリカの地を踏む」と表明していた安倍首相。このアフリカ訪問の直前には中東のオマーンも訪問し、湾岸協力会議（GCC）全6カ国の訪問を実現させた。日本の現職首相の本格的なアフリカ訪問は8年ぶりとなる。01年1月に森首相（当時）が、南アフリカ共和国（以下、南ア）、ケニア、ナイジェリアの3カ国を訪問。これが日本の現職首相として初めてのサブサハラ（サハラ砂漠以南）のアフリカ諸国訪問だった。以降も、小泉首相（当時）が02年9月に国際会議出席のため南アを、さらに06年4～5月にはガーナとエチオピアを訪問した。

安倍首相は昨年8月の中東歴訪の際にジブチも訪れていたが、本格的なアフリカ訪問は初めてだ。日本では小泉政権以後毎年のように首相が交代し、現職首相

がアフリカまで足を延ばすことが難しい政治環境があったといえる。定期的に国家元首や閣僚がアフリカを訪れる中国などと比較し、出遅れが指摘される日本のアフリカ外交において、久しぶりに明るい話題だろう。一方で中国は、安倍首相アフリカ訪問直前の1月6日から6日間の日程で、王毅外交部長（外相）がエチオピア、ジブチ、ガーナ、セネガルの順に4カ国を訪問。1991年から行っている、政府要人による定期的な「年明けアフリカ訪問」の一環といえるが、習近平政権発足後では、外相による初のアフリカ訪問である。

### 経済人同行のトップセールス

安倍首相はエチオピアにあるアフリカ連合（AU）本部において「『一人、ひとり』を強くする日本のアフリカ外交」と題する政策スピーチを行った。日本の政策や日本企業の組織文化には、人材を大切に、育成することこそが発展の礎となるとの考え方があることを強調した。このような考え方がアフリカの発展にも必要であり、真のパートナーとして選ぶべきは日本であると訴えた。さらに、今後の対アフリカ支援対象として、若者や女性を中心に据えていくことを表明した。

コートジボワールでは、西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）の議長でもあるウワタラ大統領の呼びかけで、同共同体加盟10カ国の首脳が最大の経済都市アビジャンに集まり、安倍首相と会談した。その席上でも安倍首相は日本のアフリカ政策、とりわけ人材育成やインフラ整備への支援の継続を説明した。

今回の訪問で特筆すべきは、約30の民間企業・団体などの代表が同行したことだ。経済人の同行は、最近の首相外遊では定例となりつつあるが、アフリカとのビジネス関係強化に向けたトップセールスとして、現地側でも評価の声が高かった。特にモザンビークで



ウワタラ・コートジボワール大統領主催の夕食会の様子（上）、日・モザンビーク投資フォーラムで登壇した安倍首相（左下）

は、ジェットロが国際協力機構（JICA）や石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）などと「日本・モザンビーク投資フォーラム」を共催。日曜日にもかかわらず、双方から400人近い出席者が来場した。モザンビークでは、日本企業も参画する天然ガスや石炭の開発プロジェクトに加え、関連インフラ整備、農業開発などの大型案件が進みつつある。サブサハラ・アフリカの中でも日本ビジネス界が最も注目する国の一つとあってよい。「アミザーデ（AMIZADE）パートナーシップ」——これが安倍首相とグプーザ大統領との間で合意した、あるべき両国関係の姿だ。ここでいうアミザーデとは「友情」を意味するポルトガル語。

訪問先で安倍首相は、地域や世界の平和と安定に積極的に貢献していくとの日本政府の立場を説明しつつ、緊迫の続く、南スーダン、サヘル地域（サハラ砂漠南縁部の半乾燥地域）、中央アフリカなどにおける情勢改善への貢献に向けた資金・物資援助を表明した。加えて、東京開催が決まった20年五輪に向け、各国とスポーツ交流の促進、さらには「女性が輝くアフリカ」に向けた協力推進を図っていくことも明らかにした。

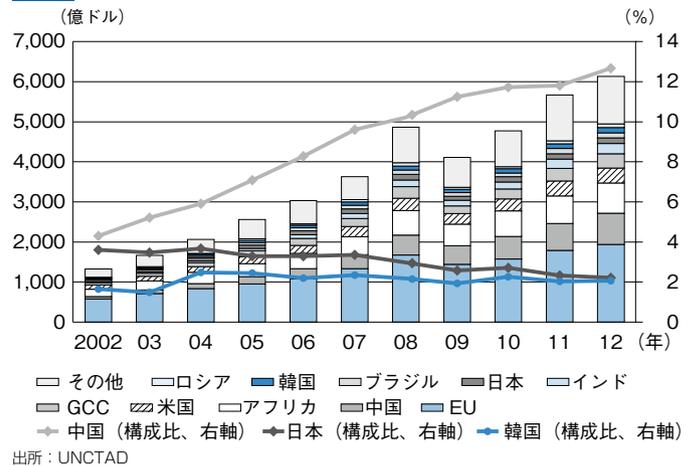
### パートナーとしての日本をアピール

対アフリカビジネスについては政府の後押しを期待する声強い。12年にジェットロが実施したアンケート調査「在アフリカ進出日系企業実態調査」では、回答した企業の実に74.3%が、対アフリカビジネスについて「日本政府が日系企業への支援を強化すべき」と回答。「関係による日本商品・ブランドのトップセールス」に期待する声も33.6%あった。

コートジボワールやエチオピアでは、空港から市内、首相の宿泊先ホテルまでの幹線道路に日の丸と相手国旗が掲げられ、歓迎ムードが強く打ち出されたことが印象的だった。コートジボワールのウワタラ大統領主催の夕食会では、両首脳の顔写真が大きく載った大型看板が会場に設置され、総勢500人が招待された。同夕食会には、前述のECOWAS加盟諸国からも10カ国の首脳が招待され、安倍首相を囲むように懇談が進んだ。同行した経済界代表を併せた日本側訪問団は総勢約200人に及び、官民挙げて日本の存在感を示すことができたといえる。

このような歓迎ムードとは裏腹に、アフリカでの商

図 アフリカの世界主要国・地域からの輸入額推移



機をめぐる各国企業の競争は激しさを増している。アフリカの世界主要国・地域からの輸入額の推移を見ると、日本のシェアは漸減傾向にある。圧倒的に存在感を増しているのが中国で、02年にはわずか4.3%だったシェアが、12年には12.7%に拡大した（図）。中国からの輸入額777億1,500万ドルというのは、日本（135億9,600万ドル）の5.7倍に上る（12年、UNCTAD資料）。インドも日本に拮抗するまでにシェアを伸ばす。対アフリカ投資額でも同様の傾向が見て取れる。

本誌当欄（13年10月号 p.72「TICAD V 後への提言」）でも紹介したが、TICAD Vの主要議題は「ビジネス関係の強化や貿易・投資のさらなる促進」だった。その流れをくみ、安倍首相は多くの経済人を同行させ、アフリカとのビジネス関係強化に取り組む姿勢をあらためて示したといえよう。同行した企業関係者からも、評価の声が多かった。

一方で、安倍首相は政策スピーチで「日本らしさ」や「選ぶべきパートナーとしての日本」を強く打ち出した。これを「中国への対抗意識の表れ」と評する報道も多く見られた。王毅外交部長は訪問先のセネガルで記者団に対し、「中国の支援は、アフリカの友人たちの国への思いに応え、文化を尊重するもの。中国人エンジニアや労働者に対する（セネガル政府の）配慮にも感謝する」と述べ、中国の援助はハコモノ造り中心で、中国人労働者によって実施されている、との批判に反論した。このような発言には、人材育成や技術協力を強みとする日本の支援への対抗が念頭にある、との見方もあるようだ。